

百周年を迎えるに当たって

斎藤 亥三雄

新島先生がアメリカ滞在中に、遠くはなれた日本の国が、とにかく明治維新を迎え、新時代の一步をふみ出したことを聞かれたときその感激は如何なものであったろうか。

神は日本の国を護り給うたのだ。これからも護り給うであろう。今度は自分の出番だ。神はこのために自分をアメリカに渡航させ、教育されたのだ、と確信されたに違いない。その確信が、あの一八七四年のアメリカン・ボードの年会における、演説になったに違いない。

御承知の通り、先生が選んだ日本に尽くす方法はすこぶる迂遠であった。少なくとも、当時の人々が、日本に最も緊急のものと考えそうなものではなかった。教育、しかも私立学校による教育、更にしてもキリスト教主義による教育がそれであって、日本の将来にこのような学校が必須のものであるとの先生の確信に由来するもので

あろう。

同志社はかくして出発した。そうして一〇〇年を経過した。同志社は先生の意図を体する地の塩的人々を世に出しつつけた。あるいはその間に、「生きていけるといふのは名だけで、実は死んでいる」(黙示録3章1節後半)ような時代もあったであろう。あるいは、「熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう」(黙示録3章16節)と譴責^{けんざい}されるような時もあったであろう。しかし、いつも「少ししか力がなかったにもかかわらず」(黙示録3章8節後半)はじめの新島先生の志を忘れず祈りつつけた同志もあって、同志社は今日まで保たれたに違いない。

さあ、私どもは「はじめ」(黙示録2章4節)に帰って、摂理の神を信じて、ゆつくりと、心豊かに一〇〇周年をむかえよう。そうして再出発しよう。バビロン捕囚を許されて故国へ出発しようとするイスラエルの人々のように。

あなたがたは急いで出るに及ばない
またとんで行くにも及ばない

(イザヤ書52章12節)

(同志社理事長)

創立百周年に向かいて思う

住 谷 悦 治

(一)

いま、わが同志社が創立されて間もないころ、明治九（一八七六）年新島襄先生が三十三歳の一月一日に、デビス先生（当時三十八歳）、ラーネッド先生（二十八歳）と三人して比叡山へ登ったということと、新島先生が永眠された明治二十三年の一月初め、大磯に病氣療養中に書かれた有名な漢詩との、新島先生と同志社との初めの正月と先生最後の正月との、正月の二つの事実を思い出します。わたくしにとって忘れ得ない印象的な「二つの正月」のことです。何故かと申しますと、最初の正月一日に、同志社教育の基本的精神を代表するといつてよい三人の先生が、同伴して比叡山に登り、恐

らく山頂から京都の町を眼下に遠望し、琵琶湖の湖面を超えて遠く江州平野を双眸のうちに納めつつ、同志社の創設の理想と経営の困難さと文化の遅滞している日本の実状とキリスト教教育の意義の重大性と前途に横たわる、限り無い荊棘の道とを語り合ったことでありましょう。この三先生の登山の物語りは誰れもその実状を語ってくれておりませんが、三人とも人生の働らき盛りであり日本文化の向上と教化の理想に燃えている先覚者が、ただ漫然と四方山の雑談に時間を空費したはずがありません。真剣に同志社創建の理想と日本文化、日本の精神教育の意義ということについて相互に語り会わなかったなどと想像することは考えられません。必ずや火花を散らすような熱意のこもった理想に燃ゆる談話が交わされたに相違ありません。これはわたくしの単なる個人的な想像ではありますが、こ

の想像はその後における三先生の同志社教育への実践と熱誠にあふれた協力の歴史の事実を顧み、かつ同志社の発展の姿を展望することによって、この三先生の一月一日の比叡登山の当時の姿をその後の同志社学園の歩んだ道に投影してみることに、必ずしも荒唐無稽の想像ではないと思っております。そののみか、わたくしはこの明治九年一月一日の三先生の比叡登山を展望するだに心の熱くなるのを覚えるのであります。

もう一つの正月一日、新島先生が大磯の旅宿に各地への募金運動に奔走尽瘁されて疲労の上に病を得て年末から病床にあったとき筆を呵しての作詩であります。その詩こそ、まさに懦夫をして奮起せしめるでいのものであります。詩に曰く

送歳休レ悲病羸身
鶏鳴早已報佳辰
劣才縦乏済民策
尚抱壯図迎此春

右

養病於大磯迎廿三年之春
裏面

このすばらしい人生的態度にたいしてはただ襟を正して頭を垂るるのほかはありません。やがて一カ月以内にこの世を永遠に去られるとはつゆ知らず、再び立ち得ない病軀を神の思召に委かせて、な

お「壯図」を抱いて新春を迎えられた新島先生の壮烈なる意気込みに打たれるのであります。病弱の身をものともせず、自らの経国済民の才能にとくに自信を有つことなく、しかもあらんかぎりの「壮大な意図」を抱かれ、とくに恐らく同志社創立の意義と理想とその達成のために揮身の勇気を振り起こされた正月一日の朝の先生のお姿を展望して、八十四年の歳月を経た現在、わたくしも一人の後輩として、一人の同志社人として勇を鼓して揮ひ起たざるを得ない思いがするのであります。同志社創立当時の先生のご苦心と理想も、やがてこの世を去らるることも気づく由もないその年の元旦の朝の壮大なる意図も、先生の勇気と情熱において変わるところはなかったものであり、その正月五日には、その後、現在に至るまで新島先生の燃ゆるがごとき壯図、ひるむことなき勇猛心を偲はしめる歌にこめたのであります。

いしかねも透れかしとてひとすじに
射る矢にこむる大丈夫（ますらお）の意地

という歌であり、この歌はその後間もなく画仙紙半折に墨痕鮮かに大書されてわれわれ同志社人に遺されたのであります。石鉄をも貫く勇壮な意地であるといわねばなりません。その一月十一日には「小生大学募集（金？）の爲去十月中出京、十一月下旬上州に参り病にかり、志を果さず空しく帰京し、爾来病を相州大磯に養居候、小生の心情御洞察被下度候、又大学成就の爲めに頻に天父に御哀求下度候也」という言葉を含めての長文の書簡を新潟県伝道に従事し

ている原忠美に書き送っているであります。「将来同志社に大学料をおき之を維持する等は、越後の合力を以て実に容易と存候」という励ましの言葉もその長文の手紙の中に書いてあります。今から想えば死の将に至らんとする直前までも、愛児同志社が大学を頂点として綜合学園として発展開花することを、実に瞬時をわかつた祈願・切望していたのであります。最初わたくしが、同志社創立後の最初の一月と、永眠された年の一月との二つの正月を偲んだ理由はまことにこの点にあります。いま同志社は創立以来、九十九年、来年はその百周年を迎えるにあたって、とくに全同志社人、校友・同窓、現在の同志社を担当している教職員すべてと学生々徒の諸君と共に、この九十九年、この百年を如何なる覚悟のもとに迎えねばならぬかを、ともに考え、ともに謀り、ともに心に期するところがなければならぬことを相語りたいのであります。

(二)

いうまでもなく学校とは、教学の場としての教師と学生との教育関係の場と、教学・経営・事務に携わる教職員との生活体としての学園生活とを包摂したすべてであり、教学の場と学園生活とは、いわばメダルの表裏であり不可分の一体であります。この啓蒙輔車の密接不可分の関係にあるところの全体として、これを維持発展させてゆかねばなりません。新島先生らしい同志社の歴史はいわば創立いらいの苦心のこもった学校経営の歴史であります。新島先生がたびたび申されました「教育事業」の意味であります。新島先生はそ

ることができたならば、必ず一つの大学を設立し、その光りによって、祖国の運命の進路を照らし、将来日本の文化のために、少しなりとも微力をつくしたいと、こいねがっているものであります。ああ、満場の聴衆諸君よ、わたしのまごころは、以上のべたとおりである。このわたしの精神を深く察し、平素よりいだいて一片の志に対し、賛助をたまわる有志者はないであらうか。

先生がこの熱烈な真意を訴えるとき、情あふれ、胸はふさがり、いくたびか壇上で涙して、演説がとぎれたということであり、その別れの演説の直後に数千ドルの寄附金が集まったといわれております。それは同志社人のほとんどすべての人に語りつたえられ、知られている有名なことですが、教育事業が教学と経営の啓蒙輔車の密接不可分の関係にあることは、新島先生ご自身の最もよく存じていることであり、身をもってその理想を實踐されたことであります。この講演のあとで、直ちに粗末な衣服をまとうた、やせた一人の老農夫が、しずかに先生に近づき、しきりにふるえながら、懷中から二ドルをとり出してハラハラと涙を流して「わたくしはまししい百姓であります。この二ドルは帰りの汽車賃にもつてきたのであります。いまのご演説を聞きまして感激いたしました。わたしは年老いてはいてもまだ両脚は歩いてわたしの家へ帰ることができまふ」と言ってお金を差し出したという感激的場面さえあったというのであります。

新島先生が、わが同志社を創立されてから先生は殆んど日本の各地を廻って、同志社設立の意義を説き、その発展と維持のために素

のはじめにおいて申されました。「明治の新しい政治を行おうとするに際し、社会の秩序はやぶれ、国の法令はみだれ、人心はその向うべきところが、わからない有様である。そこで今日のわが日本に正しい教育事業をおこし、これによって、国家を治める大根本をたてるとともに、これによって、知識を開発し、まことの文化を盛んにしようと思うならば、それにはよろしく欧米文化の一大根本となつていところの教育にこそ、力を注がなければならない」と。またそれであるからこそ、またその崇高な大目的を貫徹し、発展させるためにこそ、先生は心身を尽くして堂々と憶することなく募金運動に東奔西走されたのであります。

明治七年（一八七四年、ちょうど今から百年前）にアメリカ留学を終えて日本に帰ろうとした時、たまたま開かれたアメリカ海外伝道協会——アメリカン・ボードと呼ばれていました——の大会がバーモント州のラトランドというところで開かれましたが、先生はその大会に出席され、別れのあいさつをされた言葉の中につきのような言葉があります。

わたしは思う、わが祖国の同胞、三千余万の将来の安危禍福は、単なる政治上の改良だけによるものでなく、また単なる文物文明の進歩だけによるものでもなくして、それは、まず第一に教化の大いなるはたらきが、何よりも影響を及ぼすのであり、教育の方針が良いか悪いかということに、深い関係をもっていることは明白であつて、少しの疑いもないところである。

わたしは、いま貴国の紳士諸友と袖を分つて、無事に祖国に帰

手でもって堂々と何ら憶することなく募金活動をなされました。わたくしはそのおどろくべき事実——ラトランドにおける先生のご講演のときの感激的な事実——に勝るとも劣らないいくたの日本における人びとの事実を挙げることができまふ。

明治二十二年一月からの、徳富蘇峰「国民之友」第四卷第三十七号、第四十三号、第四十五号、第四十九号、第五十号、等々、さらに明治二十二年十二月第六十八号における「民友社」の社告において「同志社大学義捐金第二十回募集は、前記（総計金三百九十九円五十九銭）を以て締切とす、但し今後も京都同志社の創立事務所においては引き続き取扱候間本社に御委託の向は回送方可取計此段廣告候也——十二月二十二日、民友社」という広告によってよく知られているのであります。それは殆んど全国の各地、各有志の集団、小学校のクラスの有志などからの同志社への寄付金の受取証ともいふべき「国民之友」の広告欄にその金額と姓名とが何百、何十というほど多数記録されているのであります。すべてそれは新島先生の奔走の努力と偉名とによるものでありまふ。そのごく一部の状況を摘記してみまふ。

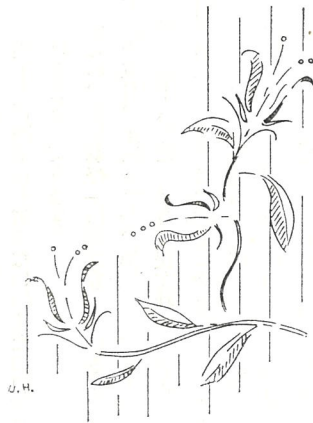
金額は例えば金三十銭（上州甘葉郡小学校三年級、斎藤たつ）、金二十銭（同四年級湯浅すめ）、金二十五銭（同一年級湯浅平八）、金十銭（前南村、西郷村、岩瀬安之助、岸米蔵）、金二十銭（上山町青年会員神尾豊助）、金十銭の部何十人、金五銭の部何十人と一々姓名が掲げられてある。金一円、金十銭という寄付が実に多数であります。明治二十二年五月号には四国地方の今治町、はじめ伊予郡の金二円、成瀬力、一円、風早町山下寅吉、五十銭、本町田野信太郎等

々数十名の姓名が掲げられてあります。四十九号には山口県、和歌山県、埼玉県、栃木県、静岡県、兵庫県、徳島県などの町村の寄附金の多くは十銭、二十銭の金額ですがそれぞれ数十名の姓名が掲げられてあります。一々ここに紙面を費してその零細の金額や姓名を掲げては詮なきことでありますが、上述のごとく日本各地の有志が、「同志社大学義捐金」として募金に応じているその金十銭、十五銭の寄附金の多いこと驚くのはありませんが、その受取証広告を見て眼の底が熱くなるのを覚えるのであります。わたくしたちがまだ生まれぬ以前に、まだ同志社の名さえも知らぬ時代に、全国各地の有志、青少年男女が同志社を援助し、新島先生の偉業をたたえていたのであります。それが今日の大同志社の基礎を築いた隅の親石となっていたと考えてよいではありませんか。「国民之友」第六十八号、明治二十二年十二月二十二日号、先生御永眠一カ月前までの十四回に亘る「同志社大学義捐金」の受取広告を、感激の念をもって凝視するとともに、現在同志社創立百周年記念日を来年に迎えるにあたって、歴史的現在において覚悟を新しくしなければならぬと思っております。ともに決心を固めましょう。

幸いに同志社は創立いらい新島先生によって示され、長く実践されてきた創立精神なるものを有っております。それはキリスト教主義に立つ教育、新島精神Ⅱ同志社精神であり、平民主義・民主主義精神であり、非官僚主義であり、人間の自由と平等の精神であり、愛と真実の人間尊重の精神であり、自主自立とともに国際的精神を大切な伝統としている平和の精神であります。これは単なる美わしい言葉ではなく、事実において先輩によって受け継がれて実践され、

時に起伏があり、断続的であったとしても、それが基本的には九十九年貫かれてきた精神であります。九十九歩をもって一步とせよという訓言もあります。新島先生は勝海舟との談話のさい、同志社はその成るにおいては二百年もかかることを覚悟しているといわれたと伝えられ、その言葉はまた勝海舟をして感動せしめたことと承っております。人間の形成とか完成とかいうことに年月を要すること、教育に年月を待たねばならぬことは明らかであります。しかしその時代その時点において歴史を担当し、責務を托された人びとは、「この秋は雨か嵐か知らねども、今日のつとめの田草とるかな」の歌の意味を考え実践してゆきたいと思ひます。

(同志社総長)



ケーリ文庫開設に寄せて

——フランク・ケーリ先生と「ケーリ文庫」——

重久篤太郎

昨年の暮ある会合でフランク・ケーリ先生が亡くなったことを聞いて驚くとともに、アメリカに帰られてからついにご無沙汰にすぎたことを深く悔んだ。私が初めてフランク先生にお目にかかったのは、一九四一年一月のことである。その頃私が勤めていた同志社高商で英会話を教えるに來ていた宣教師のウィリアム・ウダードさんが、

「私の友人でキリスト教史や日欧文化交渉史の文献に詳しいフランク・ケーリと言う人がいま西宮に來ているから、君の研究のために役立つと思うので、是非とも会っておきなさい」といって、ちょうど松山から神戸女学院に出講していたフランク・ケーリ先生に引き合わされた。今から考えると、

その時は日米關係が険悪な戦争直前で身辺多忙であつたにも拘らず、フランク先生は心よく迎えて下さった。話の詳しい内容は忘れてしまったけれども、夕方から九時過ぎまで、日本における対外交渉史とキリスト教史の文献についての話をうかがったことだけが記憶に残っている。

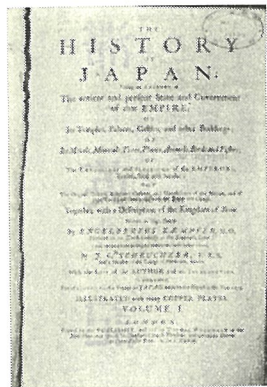
先生はその年の二月、ついに日本を離れなければならなくなり、フィリピンに赴かれた。その直前の一月末には、松山からアメリカン・ボードの日本伝道五十年史ともいふべき「Fragments of Fifty Years」を「この歴史の筆者の一人の息子フランク・ケーリ」と記して送って下さった。いま

戦災を免がれた私の蔵書の中に、小樽時代に

のフランク先生の編著が三冊ある。そのいずれも幕末から明治初年にかけての歴史記録を家蔵の「ケーリ文庫」から抜粋・編述されたもので、はじめ神戸の英字新聞「ジャパン・クロニクル」に掲げられ、のちに神戸のタムソンから単行本として刊行された。しかも、その中の二冊は、先生から離日の直前に松山から自署して送って頂いたものである。

この一九四一年の暮、ついに日米兩國は戦争状態に陥り、再びお目にかかるまでには、歲月は夢の間に過ぎた。その間終戦となり、占領中のことであったが、元の放送会館にあったCIEの宗教調査課でたまたまウダードさんに再会した。そのとき、フランク先生が来日されていることを語られ、別れぎわにウダードさんは、「今日君と会ったことを、フランク・ケーリさんに伝えておこう」と言われた。ウダードさんはケーリ先生の学識を高く評価して、尊敬されていたようである。

そのうち、一九六〇年日米修好通商百年を記念して、この記念行事運営会は日本の宗教・教育・経済・産業、政治・外交、社



ケンペルの『日本誌』

フランク先生はそれらの文献補充のほかに対外文化交渉関係の史料の収集に重点をおかれたようである。

「ケリー文庫」の蔵書は、おおざっぱに言うと、キリスト教伝道史に関する文献と西洋人の日本研究、殊に日本と西洋との交渉史に関する文献に分けることができよう。古くはキリシタン時代から江戸時代を経て幕末・明初の洋書が収集されていて、その中には貴重本も少なからず含まれている。今、ここにその詳細を尽す余裕はないので、僅かにその一端を紹介するに止めた。

キリシタン史の文献には、トリゴアの「日本におけるキリスト教の勝利」(一六二三年、太政官訳があるクラセの「日本西教



フランク・ケリー先生

会・文化の向上に功労があった二九八名のアメリカ人を顕彰した。その時フランク先生は、父オーテス・ケリー教授とともに宗教・教育関係の功労者として発表され、その推薦理由には、次のごとくに記されている。

Frank Cary¹² Amherst 大学・Andover 神学校卒。大正五年来日以來第二次大戦をのぞき、札幌、小樽、松山、神戸の各地で伝道、神戸頌栄短大、神戸女学院、梅花女子短大、同志社などの教育と経営にあたったほか、岡山博愛会、淀川善隣館の社会事業にたずさわり、父子二代にわたって「両国の」親善に貢献した。

しかし、フランク先生は、一九一一年にアーモスト大学を卒業すると直ちに来日し、YMCA 英語教師の一員として大阪の北野中学校と天王寺中学校で二カ年英語を教えている。これが先生の最初の教育上の業績である。この YMCA 英語教師というのは、明治中期から大正初期にかけて YMCA の幹旋によって、主として公立中学校に送られて来たアメリカやカナダの若い大学卒業生の英語教師をいうのである。

戦後は何回か先生にお目にかかるようになってたが、いつも話は相変わらずキリスト教宣教師や対日文化交渉史の文献についてうかがうことが多かった。しかも、フランク先生に初めから親しい気持で接することができたのは、ウダードさんが仲介の労をとってくださったこともあるが、先生の寛容なお人柄のせいでもあると思う。いつもお目にかかっても、おおらかな笑顔で応待されて、いろいろな質問にも心よく答えて頂いた。本当にフランク先生は私が学恩を受けた忘れられない外国人の一人であった。

私が父子二代にわたって収集された「ケ

リー文庫」の全容を知ることができたのは、戦時中の一九四三年の秋のことであった。当時仙台にいた私の許に、神戸女学院の溝口靖夫教授から粗末な用紙にタイプ印刷した「ケリー文庫目録」が送られてきた。この目録には神戸女学院所蔵とペン書きしてあった。私はこれによつてはじめて「ケリー文庫」の図書・雑誌の内容を知ることができたとともに、日本関係の貴重な資料が収集されたこの文庫が太平洋戦争の戦災を免がれて無事に保存されていることを知った。

このたび、オーテス・ケリー教授が「ケリー文庫」約千点を祖父以来三代にわたつて縁故の深い同志社大学の図書館に寄贈され、特別文庫として研究者の利用に供されることになったことを聞いて、まずケリー教授の美筆を讀みたい。この文庫の蔵書構成、日本と日本史に深い関心をもった祖父オーテス教授の収書に、これを引き継いだ父フランク先生が機会あるごとに追加されたものである。どうやら、祖父オーテス教授は日本研究文献、特に日本史と日本キリスト教関係の基本書を収集されており、父

史」(英訳本、一七〇五—一七〇七年、シャルボオアの「日本キリスト教史」(一八二八年—一九二九年)があり、書誌ではサトウの「日本耶穌会刊行書志」の初版本(一八八八年)がある。

ついで、プロテスタント史関係の収書が至って豊富であることは、次の一例でも明らかであろう。フランク先生は日本新教宣教百年を期して、英文「日本基督教年鑑」(記念号(一九五九年)に約四〇〇頁に及ぶ「日本キリスト教史」を編述された。この時先生は「ケリー文庫」中の英文年鑑「日本におけるキリスト教運動」と「ジャパン・エバンゼリスム」誌の記録やその他の資料から材料をとって、定年退職前一年間の短時間に書きあげられたのである。

このほかに「ケリー文庫」が所蔵する日本と西洋の交渉を通じての西洋人の日本研究書は、古いものに和蘭商館長カロンの「日本・シャム大王国誌」(英訳本、一六七一年)がある。チェンバレンが「日本を科学的に発見した最初の人」と言ったドイツ人蘭館医師ケンペルの「日本誌」(英訳本、一七二八年)、スエーデン人蘭館医ツンベルグの「日本紀行」(ラングレス仏訳本、一七九六年)

と有名なシボルトの「日本」(第二版一八九七年)といった代表的な日本研究の名著もある。またオランダ人モンタヌス編「東印度会社遣日使節紀行」(仏訳本、一六八六年、和蘭商館長ティチングの「日本風俗図誌」(英訳本、一八二二年)もある。さらにペリー提督の「日本遠征記」とペリーの自筆書簡があるが、「遠征記」はさすがにフランク先生の収集だけあっていわゆる「風呂屋版」ではない。幕末明初の来日英国人の見た日本記録には、サトウの「一外交官の見た日本」やブラックの「ヤング・ジャパン——横浜・江戸」などがある。今は稀書となった雑誌には、サマーズの「鳳凰」や「菊」なども揃っている。

このように、「ケリー文庫」は稀書珍籍の類だけではなく、今日もなお研究上の参考に資すべき基本的な図書・雑誌がよく収集されている貴重なコレクションである。

(元大学経済学部嘱託講師)

*

*

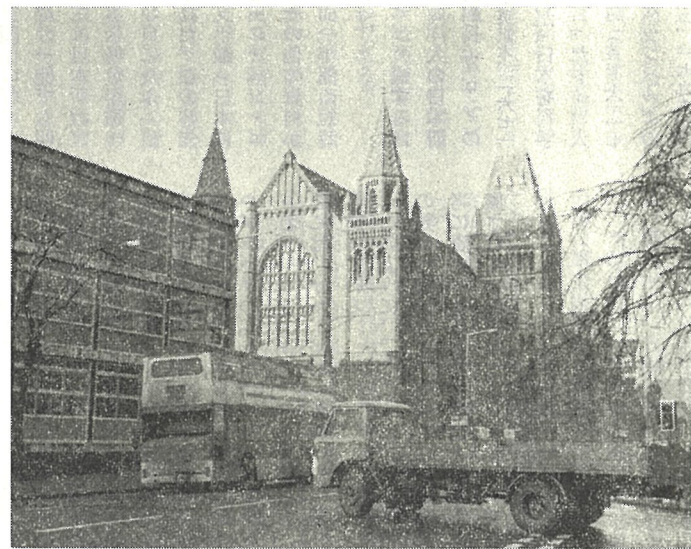
滞英記

雨 谷 昭 弘

一、英国さまざま

はじめに

今年三月中旬、およそ三ヶ年にわたる滞英を終えて帰国した。羽田に迎えに来てくれた友人の帰国歓迎第一声は「英国は石油危機で大変だったろう?」。その後会う人ごとに同じ質問を繰り返される。勤労意欲のないイギリス人、国民総生産の成長率一〜三パーセント、過去の遺産を食い潰す老大国……。これが一般の英国評かと思われる。私自身四年前に一ヶ月ほど英国を訪れた時の印象はまことに右記のごとくであった。例えば石油危機



マンチェスター大学本部

に対して英国政府のとった方針は、昨年十一月自動車用ガソリンの統制、十二月企業の週三日労働制というかなり極端な、かつ困難な道であった。昨年十二月以来、私が住んでいたマンチェスターでも商店街の照明は三分の一ほどに低減され、夕刻六時ともなると街は暗闇に近くなり、通りに人は人もないという有様であった。

英国トーリー党ヒース政権はインフレと悪戦苦闘の結果、ついには石炭ストが原因で総選挙、そして労働党ウィルソン氏に政権を譲

らねばならぬ羽目に陥ってしまった。ところがまた、このウィルソン政権もいつまでもつやらという有様である。これらの状況はまことに老大国の言葉そのものである。

——老大国?——

しかしながら、今回二年半を越える滞英生活を送った後の私の英国に抱く印象は前記のそれとはずいぶん異なっている。

なるほど英国の国民総生産の成長率は二パーセントほどにすぎない。政権は不安定、かつ万年インフレ。石油危機以来夜の街は闇に近い有様。ネオンサインが眩く人通りの尽きないニューヨークや東京からロンドンに降り立った旅行者には、ロンドンの暗い夜の姿は信じられないことかもしれない。

しかしながら、英国のガソリンスタンドでガソリンを得るために一時間以上も並んで待っているロスアンゼルス情景に出会うことはない。また、石油を原料とする日用品の不足でパニックが発生することもない。英国の家庭生活には石油危機に伴う何らの異常現象も起こらなかった。但し、これは私が英国を後にした一月下旬までの状況であって、その後多少の変化が生じているかもしれないが、もともと、私の感じからすれば、大した変化はないだろうと思われる。——この感覚が二年半を越える滞英生活の間に私が英国に対し

て抱いた印象である。

石油危機が話題になり始めてからの英国政府の政策は、ガソリンの統制、そして企業の週三日制であった。しかしながら、一般国民に対しては、電力・ガソリン等の浪費を慎しまれたいとの要請があったのみで、何ら具体的な圧迫はなかった。それが英国政府—保守党であろうが労働党であろうが—の基本的な内政の方針であると思われる。すなわち、国民生活が第一義であって、企業の保護育成、国民総生産の伸び等は二義的なことである。今やロンドン、マンチェスターでスモッグを目にすることはまれでしかない。

英国の国民総生産の伸び率の低いこと、英国人の勤労意欲の低いこと、万年インフレ等々、世界中に宣伝されている。確かに英国の一般家庭でカラーテレビジョンを目にするのはまれである。車を持っている家庭もそう多くはない。持っていたとしても米国の大型乗用車に比較すれば、小さく実用的な車が多い。また食事もうかなり質素である。しかしながら、新婚早々の若い夫婦であっても自分の家を持つことは極めて容易である。私が招待研究員として勤務していた University of Manche-

ster Institute of Science and Technology

(通称UMIST・ユミスト)の同年輩の講師連中は皆自分の家を持っている。昨年友人が家を買ったがこれは六千ポンド(四二〇万円)であった。この家は二階建てで六〜十二帖の室が七室あり、ガラーシと庭がついている。親しい助教教授が買った家は新築で、二四帖ぐらいの応接間、十二帖程度の居間、ダイニングキッチン、二階には十二帖ほどの室が四室有り、更に五十坪程度の庭がついていて一万五千ポンド(約一千万円)であった。ところで、UMIST電気工学科のスタッフでテープレコーダーやカメラを持っていない人は数多い。

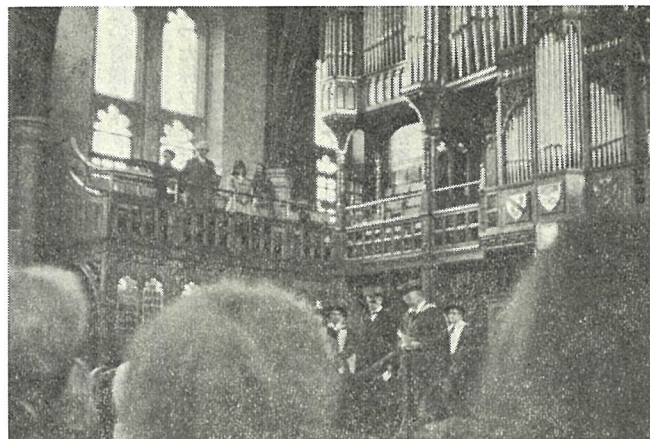
——黒人は豪華な乗用車を持っている——

英国に居住している黒人は概して豪華な乗用車を持っている。また、米国に比して身なりの良いのも特徴である。この理由は極めて簡単である。英国では米国ほど目立って激しい人種差別はない。しかしそのような意識は潜在的に存在し、例えば黒人には家売りたがらない傾向がある。もちろん大金を積めばどんな家でも買えるわけであるが、それほど恵まれた生活をしている黒人は数少ない。あ



博士号授与式のあと校内で
中央・Prof. Wedepohl

る青年と会った。彼は英語を話していたので、Englishかと尋ねたら、答はノー。そして「I am Scottish!」とつけ加えた。
ベギーさんもグラスゴウの生まれでスコットティッシュである。彼女もイングリッシュと称されることを極度に嫌う。私は英国人のことをイングリッシュと呼ぶ癖がついているので、たびたびBritishと呼びなさいと言われたものだ。Great Britainの中にEngland, Scotland, Wales, Irelandの四ヶ国があり、



Victoria University of Manchester
博士号授与式（卒業式）

る程度の金はあるが、家を買うほどではない。かくしてその金で車を買ひ、良い服を買う結果となる。

——生活の豊かさ——

私が住んでいた Flat（一軒の家に家主と共同生活。但し台所・居間・寝室完備、バス・トイレは時として共同使用。大きな家の場合は一軒の家に数個のフラットがあり日本のアパートに近くなる。）の家主は現在六四歳のおばあさんで名はベギー。傷痍軍人の弟アーチャー（六十歳ぐらい）と二人暮らしである。弟が戦争で肢体不自由、言語障害となり、彼の面倒をみなければならなかったため結婚できなかった人である。ベギーさんは老齢年金、アーチャーは傷痍軍人に与えられる年金をもらっていたが、それだけでは不足なので、ベギーさんが老体に鞭打ってパートタイムで仕事をやっている。もっとも六四歳で老齢とはいっても日本人の目からすれば五十歳程度にしかみえない元気さだが、いずれにしてもベギーさん一家二人の総収入は大した額ではなく、その生活は質素そのものであった。私の目からすればその生活は質素というより貧乏といった方が良くいらいであった。参考のため、彼女のブライバシーを犯すことにはなるが、その食事内容をいえば、朝食はインス

タントコーヒーのみ、時にビスケットを一枚。昼食は勤務先で御馳走になるか、彼の有名な fish and chips 十五ペンス（約百円）を買ってくる。夕食はインスタントコーヒーと手製のサンドイッチであった。私自身の生活は決して裕福なものではなかったが、それでも彼女の食事と比べるとまことに雲泥の差である。冷蔵庫にしても私のフラットにはついていなかったが、彼女自身は長いこと持っておらず、昨年暮やっと買ったという有様であった。このような外見を見ると、何と貧しい生活かと感じたものである。

しかし彼女の応接間を良く見ると、調度品の豪華さに驚かされる。什器類は皆銀製品である。いや、その前にその家は彼女自身のものである。そしてセントラルヒーティングも完備している。私は日本での生活を振り返ってみた。自動車、カラーテレビ、ステレオ、カメラ、テープレコーダー……。しかしながら自分の家はなく、ましてやセントラルヒーティングとは縁遠い。

——Scottish（スコットランド）——

ドイツのハイデルベルグ城へ行ったときあ

これに対応して English, Scottish, Welsh, Irish の四民族が存在する。これら四ヶ国は互いに対抗的であり、特にイングランドに対する他の三ヶ国の嫌悪感はかなり強い。これはイングリッシュが英国の原住民ではなく侵略者であることに帰因する。これらの四民族の性格はかなり異なり、英国で下宿するならイングリッシュの家庭は避けた方が良くというのが定説である。

北アイルランド問題は表向きは宗教問題という形を取っているが、実質的には被支配者階級であるアイリッシュと、支配者階級であるイングリッシュとの問題であると考えられる。

——階級意識——

英国内においてイングランド・スコットランド・ウェールズ・アイルランド等の国家あるいは民族意識が存在するのは別に、かなり顕著な階級意識が存在する。これは人種の相違に基づく一方通行的な差別意識とは異なり、それぞれの階級に伴う責任あるいは義務というべきものを伴っている。それぞれの立場をわきまえるというような傾向がかなりは

っきりしている。特にこのことは貴族階級に顕著であって、これらの人々が他の階級の人と比べて恵まれた生活を送れるその代償としての、国家に対する奉仕の意識は極めて強い。貴族といわれる人々が乗馬・フェンシング・ゴルフその他種々のスポーツを積極的に行うのは、もちろん楽しみとしての意味も大きいだが、同時に国家の興亡にかかわる事件——典型的な例は戦争——が発生した場合、国民の先頭に立って国家のために生命をかけて闘う、その日のために身体を鍛えておくという意味が強い。また、国家に対する健全な思想あるいはその基礎としての精神性を保つには、これを支える強靱な体力を必要とする考えがあることにも起因する。英国の高級貴族は、戦争に際しては前線に出て自ら指揮を取るのが常とされている。次期国王となるべきチャールズ王子がここ数年にわたって王室海軍の潜水艦に登乗していることは周知である。

冒頭に述べたごとく、国民全体の勤労意欲が極めて低く、かつ国民総生産の伸びも極めて低い老大国イギリスが、なおかつ世界の政治において、潜在的ではあれ大なる影響力を

持ち続け得るのは、これら貴族を含め指導者階級に属する一部イギリス人の国家に対する責任感と、これに伴う高い勤労意欲によるものであると思われる。

Public Bar (パブ) —

英国国といえバブといわれるぐらゐに名が売れているパブ。日本でいえば一杯飲み屋、ノレンというところ。要するに、安くビールを飲む所と言える。もちろんウィスキー、シユリー、ジンその他種々揃えてはあるが、主体はビール。それも日本とかドイツの Lager (ラーガー) と呼ばれるホップを混ぜたビールではなく、日本酒の地酒に匹敵する Brewed と呼ばれるビール (醸造ビール) を主とする。この Brewed Beer にも二種類あり、Bitter と Mild と呼ぶ。Bitter は読んで字のごとく、多少苦く、多量飲むのに適している。Brewed Beer は多くのビール製造会社それぞれ独自の手法で小規模製造。日本酒のそれと同じく無数の銘柄がある。パブの数もまた無数といえる。但し一般に大通りとか繁華街に面した位置には無く、裏通りにある場合が多い。従って海外からの旅行者にとって、

時ごろ家を出、十時過ぎまでレストランで食事をして、それからナイトクラブへ、というのが一般のコースである。なおクラブと呼ばれる性質上、本来は会員制であったが、最近では会員でなくとも入場できる場所が多くなった。ナイトクラブでは、会費に匹敵する入場料を入口で支払い、内部ではパブと同じ方式で飲めば良い。

二、英国の大学

——教員の一日——

UMIST 電気科の教員の生活は、朝一講時に講義のある場合を除いて午前十時ごろより始まる。オフィスへ着くと、まずスタッフ・ルームへ行き Tea Break (お茶の時間。英国といえは紅茶と一般に考えがたが、最近では主としてコーヒー)。いろんな話をする。十一時ごろオフィスへ戻り仕事。十二時過ぎ同僚と共に昼食、これが大体二時頃まで。オフィスへ戻り一時間ぐらゐ仕事をして、三時過ぎより午後のティーブレイク。四時ごろ室へ戻り、一時間ぐらゐいすると、その日の仕事は終わり、帰宅の途につく。一日三〜四時間しか仕事をしない。ユミストへ来て初めの半年ぐらゐ、一体

パブを見つけるのは困難であるように見受けられる。パブが通常、昼食時、夕刻勤務終了後および帰宅して夕食を済ませた後に利用されることを考えれば、繁華街にパブの少ないのは当然といえる。ちょっと立ち寄って一杯飲むという場所であるから、オフィス街の裏通り、住宅街の角、バス停の近くというような場所に位置するのが当然であろう。パブでの飲み代は日本の飲み屋の感覚からすれば信じられないぐらゐ安い。これはパブに限らずナイトクラブでもそうである。ジョッキ一杯 (パイント Pint 半リットル) 大体五十円から百円というところである。英国の慣習として何かお祝ひがあった場合、祝われる本人が友人同僚を招待して昼食時間中パブでパーティーを行う。私も長男誕生のとき、および博士号取得の時パブでパーティーを開いたが、四十人ほどで正午から三時近くまで飲んで八〜九ポンド 五六〇円〜六三〇円というところであった。これは、一人二杯程度のビールを飲んだことになる。なおパブでラーガーを飲むと Brewed に比して二倍ぐらゐ高つく。これはラーガーが主として輸入品であることに起因する。なおパブでは特別な

この教員は何をやっているのだろうか、まじめに働く気があるのか、と疑ったものだ。半年過ぎると、私もその生活に慣れてしまい、毎日二回のティーブレイクを取らないと、どうにも落ち着かず、仕事が手につかない状態に陥ってしまった。

ところで、ユミストの電気科教員は、いかにも勤労意欲のないように見受けられるのだ

場合を除いて飲み物を受け取ったときに支払いを行う。また、飲み物は、通常カウンター越しに本人が受け取る。自分の席までボーイに運んできてもらった場合には支払い額の十パーセント程度のチップを与える方が良い。いづれにしてもパブは安いので友人を何人連れて行っても安心である。帰国して日本のパブなところへ行ってみたが、五人で一万円はつづくに驚いた。

ついでにナイトクラブの話をする。ナイトクラブとはステージのある大きなパブといえる。但しパブよりはずっと高級なので、ネクタイとはいわないまでも、ブレザー程度を着用して行く方が良い。御婦人はだいたいナイトドレスを着用して来場される。但し安物で構わない。ステージではショーが行われ、ショーの合間にはダンスが行えるようになっている。その日の呼び物のショーは夜十二時ごろ始まり、これをもってその日のショーは終りとなる。開演は夕刻七時ごろからである。なお日本のクラブのごとく隣りに女性が座ってお酌するようなことはあり得ない。奥様もしくはガールフレンドと二人で行くのが普通である。ナイトクラブへ行く場合は夜八

が、それについて電気科全体の年間の研究業績をみると、全くすばらしいもので、私が属していた電力系統研究室だけで、少なくとも二ヶ月に一件の割で、世界最高の学会の一つである英国電気学会の論文誌に論文が発表されている。

電力系統研究室の教員は、現在私を含めて七名であるから、各教員が平均年間一件の論文を発表していることになる。一体どうしてこのような結果になるのだろうか? 働く意欲があるのかと疑いたくなるような状況でありながら、これだけの成果がどうして挙がるのか不思議であった。

ユミストで半年たち、毎日二回のティーブレイクを取らねば落ち着かなくなる頃になつて、ティーブレイクを取る前後の一時間、私自身極めて高い集中度をもって研究に専念していることを見出した。その一時間、周囲の雑音が全く耳に入っていないことに気がついたのである。それと共に、研究の成果が急速に挙がっていくのにも気がついた。すなわち、一日わずか三〜四時間の勤務時間であるが、その中味が極めて濃いのである。朝九時から夕刻五時までベッタリと仕事するより



パブでの博士号授与式

も、はるかに成果が挙がっているのである。

ここに、ユミストの教員の、一見働く意欲がないように見えながら、驚くべき研究成果が挙がっている秘密があると気が付いた。それと同時に、また、私よりも若い講師であつても、博士課程学生の指導権を持つており、教員一人に平均一、二名の博士課程学生がついており、これらの学生が、とやかく言われながらも、博士号を取得するまでに一人平均一、三件の論文を、英国もしくは米国の電気学会に提出している。これらの論文は、その指導者と連名であるため、結果的には一人の教員が年間一件は論文を発表することになる。

若い、博士号取り立てのような教員が、博士課程学生の指導権を持ち、その指導を行っている事実には、しばらく抵抗を感じたが、よく考えてみれば、Ph. D. の性質からしてそれで良い訳であり、かつ、また指導するという形で、その教員自身の研究能力も著しく伸び、多数の論文を発表する結果として、その教員の研究者としての名が、世界的に早い時期に確立すると同時に、ユミストの大学としての評価も高まる訳である。もっとも、若い教員が博士論文の指導を行うことで、博士

論文の質が低下するのではないかと憂える向きがあるかもしれないが、日本でも、表向きは博士論文の指導は大学院教授ということになっているが、若い教員が指導を行っている場合が多くあり、公然と行つか否かの差に過ぎないともいえる。また Ph. D. の審査は、外部の研究機関で行われるので、ここに充分な歯止めがあるとも考えられる。もっとも、これが単に形式的なものに陥いる可能性は充分あるが。

——大学の教職員制度——

英国の大学教員は基本的には、Professor, Senior Lecturer, Lecturer, Assistant の四者から成っているが、これとは別に Leader と呼ばれるポストがある。以上五者の教員 (Educational staff) に加え、事務関係の上級職員 (Administrative staff) を合わせて、senior staff と称す。上記以外の秘書、タイピスト、テクニシャン (technician) 等の職員を junior staff と呼ぶ。上記 senior staff と junior staff の間には秘書を除いて明らかな階級の差違があり、staff house と称されるレストラン、テイルーム、娯楽室、来客用宿舎からなる建

物には、senior staff のみしか出入りできない。特別な場合には秘書、学生等が senior staff の客として利用を許されるが、およそ二年間の滞在中、ついにテクニシャンを staff house で見ることはできなかった。これに関連して、私の office がコピー室のすぐ隣にあって、私の関係で、そのテクニシャンと親しくしていた。ユミストを去る前に、Farewell Party を開くことにし、そのテクニシャンの一人を招待することにした。ところがパーティーの数日前、彼が「パーティーに招待されひじょうに嬉しく思っている。またこれまでのあなたの、私たちに對する差別意識のないつき合ひに對するお礼も兼ね、このパーティーには是非出席させていただきたいのだが、senior staff の行うパーティーには、かつて私たちのような技術者が参加した例がない。もし私が出席することになれば、他の senior staff がきつと嫌な思いをすることになるだろうから出席したいのは、やまやまだが、敢えて出席を辞退させていただきたい。」と言ってきた。四十四、五歳のその技術者の顔は今にも泣き出しそうな感じで——もともと気のよわそうなおとなしい人ではあった

が——私は返す言葉に窮した。彼は私の妻と子供へと言って、プレゼントを置いて帰っていった。英国における階級意識は、極めて根強い。後日この人と共に他のテクニシャン数名をレストランへ案内して昼食を共にした。

テクニシャンと教員系列のアシスタントの相違は、日本のそれと異なり、英国では極めて明白である。テクニシャンは一切教育に関与しない。学生の実験の指導あるいは手伝い等全く無関係である。研究あるいは学生の実験に必要な装置の製作は行いが、その設計図は教員、主にアシスタントが、準備せねばならない。大学出身者の場合、どうしても教育的なことに、関与してくるので、アシスタントとして教員系列に属してしまう。

——Professor——

英国における教授の権威は絶対的で、日本のそれとは比較しようがない。教授は、大企業における部長以上のランクに属すると思われる。特に一つの学科の主任教授 (Chairman, Head Professor) ともなると、まことに神様の存在である。これはごく当然のことで、日本や米国のそれと比較しようとするのが誤り

と考えられる。ユミストにおいて、電気科は最大の学科で、学生数五百五十名、教員数四十名、このうち教授がわずかに四名である。すなわち、教授への実質競争率十倍。電気科には八つの研究室 (Laboratory) があり、原則としては、各研究室に一名の教授がいるはずであるが、適格者なしということで、現在四名の教授しかいない訳である。教授への資格は次の三点である。

(1) 研究業績——各自の分野において、英国での最高権威の一人であること。英国電気学会誌 (Proc. IEE) への発表論文数が少なくとも十件程度あること。(2) 研究費を持つてくる力のあること。——英国の大学の大半は国立であるが、政府からの直接的援助は、教育上の経費のみで研究費は出ない。(新しく充足した大学には、その大学の研究レベルが、ある一定の線に達するまで研究費が与えられる。) 従つて、各研究室の研究経費は、その研究室に属する教員、特に教授が政府の研究援助機関、あるいは企業等より引っ張り出してくる必要がある。さもなくば研究室が解体する。このためには教授たるもの、政府及びその分野の関係企業に對する政治力を有しておかねばならない。

これはある程度、第一項の研究業績と関係する面もある。(3) 指導力——研究室を運営して行くには、研究の実力のみでは不足で、社会的指導性が問われる。

以上三点を満足する教員は、いかにユミストが工学分野では英国最高の大学とはいえ、数えるほどしかない。私が所属していた Power Systems Laboratory には、世界最高権威の一人といわれる教員が二人いるが、いずれも第二、第三の面で不十分なため、まだ教授になれない。また第二項に関しては、電気の主任教授について、政治的権力を持った教員がいるが、第一項、第三項の条件を満たしていないため、この人もまた教授になれない。英国の、特に有名大学での教授になるのは、至難の業である。日本からの英国の大学への訪問者が、その大学の教授と会ったとき、よくその教授を Dr. の敬称で呼ぶことがある。これは、我が国において教授の称号より博士号が高く評価される傾向があるため、特に日本の企業から来られた方が、英国の教授を「……博士」と呼ぶきらいがある。この「……博士」と呼ばれた教授は一瞬嫌な顔をする。これは、四十名の教員のほとんど

が博士号を有しているのに対し、教授はわずかに四名にすぎないことを考えれば、ごく当然といえるであろう。英国の有名大学において、博士号は持つていて当たり前のことだが、教授の称号は最高權威の別称である。

— Leader —

英国の大学には Professor, Senior Lecturer, Lecturer, Assistant のほかに Leader なる教員が存在することを先に述べたが、これは研究に第一義を置く大学教員にとっては、極めて重要なポストである。Leader は、その格において Senior Lecturer に匹敵するが、Senior Lecturer と異なる点は、教育上の負担を大幅に軽減して、研究に専念できるようにしたものである。従って、研究成果に対する査定は極めて厳しい。優れた研究成果を挙げ、学会誌へ多くの論文を発表することにより、その大学の名を有名にする形で大学へ貢献するための制度が、Leader という教員のポストである。

— 研究費 —

先ほど述べたように教員は研究費をさがし

てくる必要がある。もちろんその最高責任は教授が負う訳であるが、各教員も自分の自由になる研究費が欲しい場合には、自ら捻出せねばならない。例えば、米国の学会へ参加するための旅費、専用の秘書をやとう費用、あるいは極めて特別な研究設備を必要とする場合の経費等、このようなとき、あわてて走り回ったところで研究費は集まるものではない。そのために、前もって長期にわたり、数多くの論文を発表し、研究者としての名前を確立し、これを通して政府の研究機関、企業等と連繋を築いておく必要がある。我が国の国立大学、特に旧帝大は文部省からの援助が充分にあるため、さほど研究費のことを思い煩う必要はないが、私立大学では、研究費の捻出に四苦八苦の有様である。(例えば東大の学生一人が文部省より百万円の援助を受けているとき、同志社大学学生への文部省よりの援助は、三千円にすぎない。) といって企業との連繋を持つに關しては社会的な問題があり、厄介である。文部省への、特別研究助成金へ応募しても当たったためしがない。我が国の私立大学は、この面でどうにも身動きのできない泥沼に陥っていると感じる。

— U M I S T 電気科主任教授とパブ —

教授になるには三つの条件を満たさねばならないといったが、ユミストの電気科主任教授になるにはもう一つの条件がある。といっても、慣例上そうなっているという話だが。

現在、ユミストの電気科は英国最高と称されるだけでなく、世界最高と言われることもある。確かにそう言われるに値するすばらしいスタッフが揃っている。この電気科がこれほど有名になったのは、長い歴史に由来するのではなく、ここ二代の電気科主任教授の世界的名声に負うところが大きい。一九七〇年八月までの主任教授であった Prof. Adamson は、多少専門的な話になるが、直流送電なる送電方式の草分けの一人で、この分野でバイブルと称される「直流送電」——“High Voltage DC Transmission”なる本を一九五八年に出版した人で、いまだに直流送電の神様と称されている。現在、世界各国で活躍している直流送電の著名な研究者のほとんどが、かつて Prof. Adamson の学生であった。日本においてもこの例にもれず、我が国の直流送電技術の開発に当たってきた多くの人が、直接

Prof. Adamson の指導を受けたか、あるいは、かつて Prof. Adamson の学生であった著名



マンチェスター市役所

——マンチェスターにおける産業革命の名残り。
一〇〇年前に建設され、現在も使用されている。

な研究者を通しての間接的指導を受けているといえる。一九七〇年、Prof. Adamson の後をいで主任教授となった Prof. Wedepohl は、電力線搬送波及び、波形伝播の分野において、世界の第一人者である。彼の学生もまた世界各国で活躍している。この二人の主任教授により、現在の、世界に冠たるユミスト電気科の名が確立したといえる。この二人、驚くべき大酒豪である。英国では酒(主にビール、ウィスキー、シェリー)を昼間に飲むのは常識で、パブは正午より二時半、そして夕刻五時より十一時まで開店している。Prof. Adamson に会つと、すぐにパブへつれていかれる。私は前もってある人に話をきいていたので無難に切り抜けたが、Prof. Adamson にパブへ案内されて、同教授との酒につき合えなかったら、就職のあっせんをしたらうことはできないとのことである。同教授は飲むほどに若さを増し、話がはずみ、延々としてついに朝を迎えてしまふ。

ところで、同教授はバングラディッシュ建国当時、ロンドン支部バングラディッシュに思想的に大きな影響を与えた人で、いまだに同支部では国賓的待遇をうけている。また、しだ

いに影をひそめていく昔ながらの小規模ビール製造業者の保護者的存在で、現在、同教授が学長を勤めている Poltechnic of Central London においてビール科を新設、昔ながらの手作りビールの技術維持に努力している。Prof. Wedepohl は昼食をとったことがなく、いつもユミスト電気科専用のパブで少なくとも二リットルのビールを飲んでいる。また同教授の指導をうける学生は、学部で大ジョッキ一杯、修士課程で二杯、博士課程で三杯のビールを飲めなければ卒業させてもらえない。私も同教授の指導のもとに博士号を取得するに際しては、たびたび、最低大ジョッキ三杯のビールに付き合わされた一人である。最初の半年ぐらひは、ビールを飲んだあとと夕刻帰宅するまで酔いが残って、仕事の手につかなかった。一年目あたりから、三時のコーヒーを飲めば何とかおさまって仕事ができるようにはなったが……。博士論文の口頭試問の当日には、Prof. Wedepohl の代役で来客を接待、ビールをジョッキ一杯飲んでいい気持ちで試問へ出頭。酔いがさめたころには口頭試問が終了。夕刻、同教授より呼び出しをうけ、試験官は今帰っていったが口頭試問

は合格となった、との話の後、同教授のオフィスにてまた乾杯の盃をあげ、一日酒を飲んですごした感じで、博士論文の口頭試問の日という緊張感を抱く余裕がなかった。

――授業のあり方――

ユミストの同僚とティーブレイクの時間にいるんな話をする。あるとき、日本の大学でどんな課目の講義をやっていたのかと尋ねられた。私は、一年生に電磁気学（基礎理論）の講義を行っていたので、その旨を答えたら、ケゲンそう、信じられないという表情を示した。これは英国、あるいは米国でもそうであるが、大学院の講義は若年の講師の担当で、学年が低くなるにつれ担当者の格が上がり、一年生の担当は主として教授が行うことになっている。その理由は極めて簡単明快である。専門のことを何も知らない高校卒の新生に對して、専門の講義を理解させ、かつ興味を抱かせることは極めて困難である。第一年次の講義のあり方いかんによって、その学生の大学四年間における生活態度が大きく変わってしまう。もし第一年次の専門の講義にとけ込み、興味を抱くことができれば次の

三年間においても、その分野での勉強を続けることになるであろうが、第一年次の講義に興味をなくし、やる気をなくせば、しだいに勉学から脱落し、大学とは別のところで興味を見い出す結果になってしまうであろう。このような新生に對して講義を理解させ、かつその分野に興味をもつように教育を行えるのは、その専門分野に關しての広い知識と個々の事から對する深い理解、かつ十分な教育経験を有している教授でしかあり得ないとするのは、ごく当然のことと考えられる。かくして、新生の講義は教授が担当すべきものとなったしだいである。この点、我が国においては再考の余地がある。

――博士号――

周知のように、通常英国あるいは米国で Doctor と称されるのは Ph. D. (Doctor of Philosophy) のことである。これを我が国で、時として哲学博士と訳することがあるが、この訳は不適當であると考ええる。私がマンチェスター大学で取得したのは Ph. D. Science (in the Faculty of Technology) で、和訳するとすれば工学博士ということになる。Ph. D.

の意味は、例えば Technology の場合、工学分野における研究者としての自らの思想(考え方・方針)を有しており、将来において優れた研究者となる能力を有している」ということになる。すなわち、我が国における博士号が、その分野で研究者として確立した人に与えられる、換言すれば、ある研究者の優れた研究成果——場合によってはその研究者の人生における最高の研究成果に對して与えられるのに対し、英国、米国における博士号(Ph. D.)は、その研究者の将来の研究に期待するという形で与えられる。我が国では、博士号が研究者の人生の終着駅といった傾向があり、往々にして、博士号を取得することにより研究に終止符をうち、管理的仕事に方向を転換する人が多い点、一考の余地があろう。

このような背景から、英・米両国における Ph. D. の取得は、我が国における博士号のそれに比較すればかなり容易で、平均三〜五年で取得できる。もっとも、我が国においても、有名国立大学は最近博士号を容易に授与するようになり、Ph. D. との差がなくなってきたように見受けられる。

博士論文の内容をみると、一般的に日本の

それは、英・米両国のそれより平均点としては高い。これは以上のことからして当然であろう。従って、海外の Ph. D. を博士号として認めない有名国立大学の存在する事實は肯定できる。しかしながら、我が国の博士号が、論文の内容自体の評価よりも、年功賞の色合いが濃く、指導教授の個人的判断に負う面が多い事實は再考されるべきである。すなわち、指導教授が、「君もそろそろ博士論文を書いたらどうかね」と口にしたときは、ほぼ博士号が授与されるのが確定したようなものである。なぜなら、我が国においては、博士論文の審査は、その大学の教授会、及び審査会(公開)で行われるが、いずれにしても大学の部外者は審査には最終的に関与しないので、学内だけで博士号の審査が行われることになる。この場合、本人と指導教授以外で、

博士論文の内容に關して、正しく、かつ十分に評価しうる教員がいるかどうか疑問である。もちろん、例えば工学分野の場合、どの教員にしても工学に關する一般的知識を有しているのは当然であるが、一人の研究者が、ある一つのテーマに關して、五年なり六年なりかけて必死で研究を行った内容を、その奥

底まで深く評価しうるか、といわれれば疑問であろう。この場合、もちろん博士論文提出に際して学会誌へ二件なり三件なりの論文を發表している訳で、この論文を通して、その分野の權威の評価をうけている訳であるが、これは Ph. D. の場合も同じであるから、このことをもって日本の博士号を云々する根拠はない。このような日本の博士号の審査法に對し、英・米両国の Ph. D. の審査は極めて苛酷と考えられる。提出された Ph. D. 論文の審査権は、指導教授をふくめ、その大学にはない。審査はその大学に關係のない外部の研究機関に属する研究者によって行われ、その審査結果に對し、当事者の大学は意見をきしはさむことができない。この審査官のことを outsider と呼ぶ。その意味は明白である。我が国においては、博士号がその授与大学によって格差をつけられる傾向がある。この点は英国においても同じであるが、更にその上に、outsider の誰であったかによって博士号に格差がつく傾向がある。outsider が一流の研究者であれば、その博士号は一流と見なされ、outsider が二流であれば、博士号も二流と評価される面がある。もっとも、一流

であれ二流であれ、外部の審査官による口頭試問が形式的なものに終る傾向はかなりあり、こうなれば Ph. D. 自体が形式的なもので、重要な意味は失われてしまふ。

なお、英国では Ph. D. とは別に、科学分野で D. Sc. (Doctor of Science) なる博士号が存在する。D. Sc. は極めてまれにしか与えられない博士号で、大体三十年以上の研究歴を必要とし、その研究分野における貢献度が極めて高い人の名譽を贈る意味で与えられるものと考えられる。現在のユミスト電氣科で Ph. D. を有している教員は三十名以上いるが、D. Sc. は三名にすぎない。ただし、Oxford 及び Cambridge 両大学では、Ph. D. の後三年のコース制で D. Sc. を与える。この両大学の D. Sc. は多少意味が異なると考えられる。また、米国にも D. Sc. が存在するが、米国の D. Sc. と Ph. D. は称号が異なるだけで、内容的には全く同じで、Ph. D. を取得するかあるいは D. Sc. を取得するかは本人の自由である。

――留学ということ――

我が国では、西欧先進諸国に長期にわたり

研究者が滞在することをいまだに留学と称する。別にそれらの国で何も学ぶことがなく、むしろ教える一方であっても留学と呼ぶ。そして、その留学期間中に研究や勉強などほったらかしで遊んでまわっていたとしても、あの人はどこへ何年間留学していたといって高く評価する。留学ということは云々する訳ではない。留学と呼ばれる事象に対する評価のあり方に疑問を感じるのである。というより、留学してきたといわれる本人の、留学に対する他からの評価の受けとめ方、あるいはある種の評価を期待する傾向のあることに疑問を感じる。これは、ただ留学といわれることに限らず、一般的に洋行といわれること全てについてそうである。最近、年間二百万人以上の日本人が海外旅行するようになったので、ただ海外へ行ったというだけでは、とりたててどういうこともなくなってきたが、これが数年前までは、海外へ行ったことがあるというそれだけで、何か人間が変わったような、他の人間とは何か違うような錯覚にとらわれる現象がよく見受けられた。これは同じウィスキーであっても、ジョニーウォーカーがサントリーのオールドやリザーブよりも良

いということと同一のことかも知れない。いわゆる希少価値ということである。イギリスへいけばジョニーウォーカーには何の興味もなくても、日本の酒といえは皆がそれこそ大事に大事に取り扱うのと同じである。留学してきたというそれだけで、留学中の生活がどうであれ、偉くなったような錯覚におちいる傾向があること、そしてまた、そのような錯覚におちいった人を偉いと評価する社会のあり方に疑問を感じる。仮りに、まじめに勉強して、英国か米国のどこかの大学で、マスターなりドクターなり取ったとしても、それは日本で取るのと変わりないと思うのだが、外国で取得したマスターやドクターは、日本のそれとは違って特別なものの、あるいは非常に高いものとする考え方が一般にある。もっとはっきり言えば、日本人の西欧諸国に対する自己卑下と、その裏返しに西欧崇拜である。といって海外へ旅行して帰国した後、やたら海外の批判(非難)ばかりするような態度を讃える気もない。それは無知を攻撃的態度でごまかすことにすぎないと思えるからである。ある国を単純に良い、悪いと結論することは不可能ではあるまいか。良い面も悪い面もあつ

てしかるべきではあるまいか。
希少価値というのは、数が少ないから値段が張るという一面はあるとしても、希少価値がそのまま実質的価値の高さになるものではないと考える。留学と称される希少価値を有する事がらが、ごく当たり前のこととなつて、その実質的価値を評価する時代が早くくることを望むしだいである。

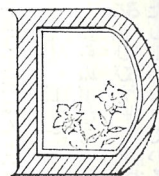
(大学工学部専任講師・電磁気学)



新島襄の故郷と

萩原朔太郎

河野 仁 昭



同志社人なら知らぬ者はない良心碑の裏面には、蘇峯の文字で、この言葉は一学生に与えた先生の書簡の一節だという意味のことを記してから、「先生永眠五十周年ニ際シ追慕ノ余門生齊議シ之ヲ先生故郷ノ産碓氷石ニ勅ス 昭和十五年十月」というふうに刻まれている。そこに「故郷」という文字が見える。

新島の故郷はたしかに、碓氷石の産地上州だが、その地で生まれたのではない。生まれたのは江戸である。和田洋一先生の『新島襄』によると、「神田一ツ橋に新島生誕を記念する碑」があるそうだが、わたしはまだ見ていない。新島の祖父の代に江戸に出、父民治は安中藩の江戸屋敷に住んでいたそうだから、

そこで生まれたのか。彼は江戸では三代目である。しかも、はじめて安中の土を踏んだのは、右の和田先生の伝記によると、万延元年(一八六〇年)、襄十七歳のときだという。

小林秀雄は文壇に出て間もない昭和初年に「確固たる環境が育す確固たる印象の数々が、つもりつもりで作りあげた強い思ひ出を持つた人でなければ、故郷といふ言葉の孕む健康な感動はわからないであらう」(「故郷を失った文学」と言った。関東大震災後、東京は目まぐるしく変貌したから、小林にとってそれは実感だったのだろう。そうした意味では、新島にとって故郷とは、江戸ではあっても上州ではない。故郷の要素は、少なくとも彼個人

にとつてはなにひとつなかったはずである。ただ、新島家は代々安中藩に仕えていたし、江戸屋敷なるものは藩の出張所程度の位置づけのものでしかなかったろうから、藩主の本拠安中が新島家の家郷であり、裏もまた例外たりえなかった。そうした意味での故郷であった。

明治維新の際に、彼の父母は安中へ引き揚げて居を構えるようになったから、事情は多少異なっているが、しかしそのときには新島は太平洋の彼方の米国に在った。慶応三年に、米国から江戸にいた弟雙六宛に、両親を案じている旨を綿々としたためた書簡を送り「故郷のわすれがたき実に茲に至るかな」とい

うふうに記しているが、それは父母の住む地もしくは故国というほどの意味だろう。藩主によって束縛されることを厭い、「本気で脱藩することを考えた」（和田・前掲書）ばかりか、禁を破って脱国を敢えてした新島の念頭には故国日本を単位として考えることはあってもその故国の特定の地方を故郷と考えるようなことは、あまりなかったかも知れない。生まれ育った土地と、名目上の故郷が異なっていたということも、無関係ではおそらくないであろう。ただし、明治二十二年十一月に松方正義に送った書簡には、「小生事も本日より郷里なる上州へ出発し、該地に於て大学資本募集に尽力仕るべく」とある。愛郷の念や実感ともあれ、彼自身、上州を故郷として認めようとしなかったわけではない。

右のようなことをとりとめもなく考えていて、しかし別の目的で萩原朔太郎の全集をひもといていたら、エッセイ集『日本への回帰』（昭和十三年）に次のような一節があって、ちょっと驚いた。萩原は上州前橋生まれの詩人だが、新島裏を語った文章があるとは思わなかった。

「上州といふ所は、おそらく日本国中に於



新島裏生誕之地碑

て、最も文化的伝統のない殺伐野蠻の白紙帯である。人は環境によって支配される。（中略）環境的に文化を所有しない白紙人は、これを異国の物に学ぶ外なかったのだ。この点内村鑑三や新島裏などの上州人なども同じであった。文化的伝統のない上州には、宗教上でも仏教の根強い伝統がなく、したがってキリスト教のプロテスタントへ、徹底的に狂信することができたのである。」

三百を越える小藩が入り乱れ、役人衆が幅を利かせていたのは事実だが、わたしには上州が、萩原の断定するような地方であったか否かを語る用意はない。それに、新島は上州で育ったわけではないから、その「環境によって支配」された人物とは言いがたいのではないかとも思う。ただし、上州人の血をひ

いている事実は否めない。萩原は、右のエッセイ集の中で、次のようにも言っている。

「文化をその環境に所有しない上州人は、自己の生れた故郷に対してさへ、何の愛着も関心も持って居ない。内村鑑三は、人に生地を問はれる毎に、常に憤然として答へて言った。人が偶然に生れた地方の如きが、何で故郷と言へるものかと。新島裏もまた、その墳墓を故郷に建てることを嫌った。」

萩原朔太郎のエッセイには、実証的な手続きを経ずに、直感と想像力で押しまくるところがあるので、詩人萩原を知るうえでは興味ふかくても、それをそのまま事実として鵜呑みにすると危い場合がある。たとえば、詩の韻律を彼が強調していたころ、芭蕉は俳句の音楽性を第一義的に重視し、「俳句は調べを旨とすべし」と弟子に教えていたと萩原は書いて（四季十号）、終生彼を師と仰いでいた三好達治から、芭蕉は「強ひて云はんとならば、ひびき、句ひ、寂、しをり、此四つをもて四義と云はんか。其れも要らぬ事なるべし」と書いているので、特に「ひびき」を重視せよとは言っていないとたしなめられている（四季十二号）。萩原のエッセイにはそういうこと

ろがある。新島裏が「墳墓を故郷に建てることを嫌った」事実の有無については、わたしは知らない。むしろ粒粒辛苦して己れの理想を具現しようとした同志社がある京都を、永眠の地に選んだと言った方があっている気がする。ただ、父祖の地を墳墓の地としたいという心情は、新島にはさほどなかったように想像はできる。父民治宛に、京都への転籍手続きについて再三依頼の手紙を書いているだけでなく、両親にも京都へ引越すようすす

めているほどである明治八年。あるいはその事実は、新島の故郷の觀念に、よりふかく関係することなのかも知れない。



新島旧宅（安中市指定史跡）
明治初年、新島裏の両親が住んだ

それはともかく、萩原朔太郎が故郷上州をかならずしも愛していなかったことは三好達治も証言（三好詩碑）するところだが、かならずしもそれは、上州が「文化の伝統がない土地」だったからではなさそうである。医師の家に生まれながら学業を途中で放てきし、自分の家族すら養うことができないような詩人になって街巷をさまよう、そういう身過ぎのコンプレックスの作用の方が、むしろ大きかったと言つてよからう。「かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんでゐた。単に私が無職であり、もしくは変人であるといふ理由をもって、あはれな詩人をも嘲罵し、私の背後から唾をかけた。（中略）少年の時から、この長い時日の間、私は環境の中に忍んでゐた。さうして世と人と自然を憎み、いっさいに叛いて行かうとする」（純情小曲集・巻頭の「出版に際して」と書いている。現代詩人に対する無理解は、単に上州のみではなかったろうが、彼らへの憎悪反感が、萩原の故郷観、上州観に底流していることは、

おそらく否めない。

その萩原の詩碑が戦後、前橋市の敷島公園に建った。誰の、あるいはどういう団体の発議によるものかは知らないが、碑面の銅板には、やはり上州出身の詩人・評論家伊藤信吉の撰による次の六行が刻まれているという。

わが故郷に帰れる日
汽車は烈風の中に突き行けり。
ひとり車窓に目醒むれば
汽笛は闇に吠え叫び
火焔は平野を明るくせり。
まだ上州の山は見えずや。

過日、上州で出身の住谷悦治総長におうかがいしたら、冬、東京から上州へ汽車でむかう情景は、まさにこの詩のとおりであること。そして敷島公園の詩碑のあるところは、前橋市でもっとも美しい所だ、という意味のことを教えられた。だが、詩碑に撰ばれた帰郷の、詩碑に刻まれない部分は、次のように続くのである。

夜汽車の仄暗き車燈の影に
母なき子供等は眠り泣き
ひそかに皆わが憂愁を探れるなり。

嗚呼また都を逃れ来て

何所の家郷に行かむとするぞ。

過去は寂寥の谷に連なり

未来は絶望の岸に向へり。

砂礫のごとき人生かなノ

われ既に勇氣おとろへ

暗憊として長なへに生きるに倦みたり。

いかんぞ故郷に独り帰り

さびしくまた利根川の岸に立たんや。

汽車は曠野を走り行き

自然の荒寥たる意志の彼岸に

人の憤怒を烈しくせり。

詩の標題には、「昭和四年冬、妻と離別し二児を抱へて故郷に帰る」という添え書きがあると云えば、もはや詩の背景や内容についてはなんの説明も要すまい。

そうした萩原の故郷への対し方、かかわり方が、多分にその上州観を規定しているし、同時にそれは、内村・新島に対する彼の見方をも規定していると言わねばならぬだろう。しかし、だからと言って、それが萩原の独断にすぎぬと否定し去ることは、おそらくできない。この国では伝統の根をもたずむくいら

れることの少ない現代詩人として生きた萩原と、地元民の抵抗や無理解に屈することなく、「キリスト教主義」を教育の基本とする私立学校同志社の設立と維持発展に生涯を捧げて悔いなかった新島襄とは、相通ずる面をもつことも確かだからである。

端的に言ってしまうえば、彼らは叛逆者でありエトランゼだった。そしてそれは、彼らの栄光であった。文化の伝統がなかったから異国のそれを学ぶばかなかったし、キリスト教の熱心な信徒も生まれたということを、萩原は言っている。あるいはそうでもあったろう。

しかし、それはなにも、異国の文化やキリスト教でなくてはならぬというものではあるまい。萩原も言う京都や金沢の地方文化に学び、それを育てようとしてもよかったはずである。彼らがあえてその道を選ぼうとしなかったのは、上州もふくめてこの国の伝統文化や封建制度への叛逆なり抵抗によるのではない。読売新聞社が先年、群馬県で「上州人を代表する人物」について調査したところ、四〇%が国定忠治とこたえたという。「関八州の役人衆」に桶突いた国定忠治に流れている上州人の血が、萩原にも、そしてわが新島襄

にも流れていたのではないか。よかれ悪しかれ詩人はその人の郷土的なるものから逃れえないし、萩原も例外ではない。新島は親を思う心の篤かった人である。にもかかわらず、彼らにとつて故郷は、この国の限られた一地方である必要はなかった。また、彼らのような叛逆者、抵抗者によって、伝統のフィードは広げられ、変革もまたもたらされたのである。

明治二十二年十二月、募金運動で上州前橋市を訪れたとき、新島は病を篤くし、翌年一月大磯の客舎で他界した。

「かねて企て申候上州の運動も、諸事相運びかけた時、床に臥し申し、寒気強き為めに病は中々に速やかに平癒の見込みもこれ無きにより、残念ながら諸事打ち捨て、昨十三日遂にその地を出発し、赤城・榛名を背に為し東京に帰りけるその旅人の心情は、何卒々々御推察下され度く候」と、八重夫人宛の手紙に書いている。「旅人の心情」と彼は言っている。父祖の土地上州は、募金運動に訪れる新島襄にとって、やはり旅先の一地方以上のものではなかったであろうか。